

被災地域の高校生（宮古高校、山田高校、久慈東高校、岩泉高校、宮古北高校）の想い・考え（2011～2021年）

【セレクト4（改訂版）】（全5枚、15編）

実施年度（実施した高校名）

『題名』 番号）（内容の分類） 『体験』：被災体験と伝承

『環境』：身近な自然環境を活用した防災・減災

『支援』：国際支援・国際交流

『生き方』：これから私ができること

平成23～26年度（宮古高校）

- 『私が考える（できる）マングローブの保護』 01) 体験・環境・支援・生き方
- 『3.11から三年目の今、私ができること』 02) 体験・環境・支援・生き方
- 『自然災害と国際協力』 03) 体験・環境・支援・生き方
- 『地球環境の保全と日本の役割』 04) 体験・環境・支援・生き方
- 『東日本大震災を後世に伝える方法』 05) 体験・環境・支援・生き方
- 『東日本大震災を後世に伝える方法』 06) 体験・環境・支援・生き方
- 『3.11から四年目の今、私ができること』 07) 体験・環境・支援・生き方

平成28～30年度（山田高校）

- 『東日本大震災から6年を経た今、
私ができること』 08) 体験・環境・支援・生き方
- 『東日本大震災から8年目の今、
私ができること』 09) 体験・環境・支援・生き方

『東日本大震災から8年目の今、

私ができること』 10) 体験・環境・支援・**生き方**

『身近な自然環境を活用した防災・減災』

11) **体験**・**環境**・支援・生き方

令和元年度（岩泉高校）

『東日本大震災から十年目の今、

私ができること』 12) **体験**・**環境**・支援・**生き方**

令和2年度（宮古北高校）

『東日本大震災から十年目の今、

私ができること』 13) **体験**・環境・支援・**生き方**

『東日本大震災から十年目の今、

私ができること』 14) **体験**・環境・支援・**生き方**

『私ができる国際支援活動』

15) 体験・環境・**支援**・生き方

（※ 在籍年度・高校名・学年、氏名（（震災当時の在籍校）・学年）、『題名』）

01)平成 23 年度宮高 2 年 S さん(宮高 1 年) 『私が考える(できる)マングローブの保護』

マングローブとは、海水と淡水が入り交じる河口・沿岸に生育する植物群の総称である。また、マングローブは他の生物が生活できるような適度な環境を提供してくれていると同時に、台風等の暴風雨や高波・潮風から土壌や陸上生物を守っている。実際に 2004 年のスマトラ島沖地震の 20 数万人が亡くなったのは、津波防止に役立つ海辺のマングローブ林が日本向けエビ養殖のために伐採されたことが大きいと報道されていたのを覚えている。

天ぷらやお寿司など、日本人はエビを食べる機会が多い。調べたところ、その証拠に日本のエビの輸入量は世界第 2 位で、第 1 位のアメリカと合わせた二国で世界のエビの消費量の約 7 割を占めている。日本でマングローブは奄美大島以南にしか生息しないことから、マングローブ林の減少問題についてあまり意識されていない。しかし、上で述べたことから、私達はこの問題を無視することはできない。いわば日本人の欲望のために環境が破壊されているからだ。

解決策は、日本やアメリカが消費量・輸入量を減らせばよいという単純な問題ではない。エビの生産で生計を立てている人々に大きな経済的打撃を与えるからである。経済効率が悪くても、環境負荷の少ない養殖法への転換を進めていくことこそが今後の課題なのではないか、と私は考える。

02)平成 25 年度宮高 2 年 N さん(田老一中 2 年) 『3.11 から三年目の今、私ができること』

私は 3.11 の東日本大震災を実際に経験したし、実際に目にしました。その津波があってから 3 年目の今、私ができることは 2 つあると思います。

1 つ目は、後世に伝えていくことです。私達は本当に辛い経験をしました。しかし、これが最後という訳ではありません。津波や大地震は、何年、何十年、何百年後かにはまた起こるものです。もしかしたら、東日本大震災よりもひどい震災になるかも知れません。次の震災でたくさんの人の命を失わないためにも、このことを語り継ぐべきです。大人たちが語るより、私達若者が経験したことを話す方が、これからの人たちにはタメになるのではないかと思います。本当にあったことを話すのは正直辛い部分もありますが、全てを話すべきです。

2 つ目は、3.11 の大震災の反省をもとに、これからの街作りや防災対策について考えていくことです。これから将来、街などを復興・発展させていくのは私達です。その私達が、今からそういうことを考えていくべきです。どんな街にすればたくさんの命が救われるのか、どんなことをすれば多くの人が避難できるのか、それを考えるのはこれからの未来を担う私達だと思います。

3 年前の震災で、たくさんの辛いことや反省があると思います。それを語り継ぎ、考えていくことが私達ができることであり、私達の役割なのだと思います。

03)平成 26 年度宮高 1 年 S さん(宮古二中入学前(小 6)) 『自然災害と国際協力』

今夏季休業中、私は 2010 年に大地震の起きたニュージーランドのクライストチャーチという都市に行きました。クライストチャーチは震災から 4 年経ちますが、まだ街は復興していません。市内観光では、被災者が座っていたというイスが並べられた所や、崩れたままの大聖堂、その代わりに建てられた紙で作られた教会などを見学しました。市役所へ行き、日本の震災についてプレゼンテーションをした後は、クライストチャーチの市長と震災についての話をしました。市長からは、震災時に日本の救援隊がとても活躍していた事、日本にもニュージーランドの救援隊を送った事、日本とクライストチャーチに同じオブジェを建てた事などを聞きました。そして最後に、「同じ経験をした国どうしだからこそ強い絆ができる。両国の関係は簡単に崩れないだろう。」と言っていました。

今まで私は被災者として支援を受けるだけでした。しかし今回、同じように苦しんだ人々と出会って私も支援をしたいと思いました。自然災害は世界どこの国にも起こりえることです。大震災を経験した日本だからこそできる支援があると思います。もし他の国で自然災害が起きた時、私も何か協力したい。そうするためにはどうするべきか、これから探していきたいと思っています。苦しいのは自分だけではない、応援し、助けてくれる人がいるんだということを世界に広めていきたいです。

04)平成 26 年度宮高 2 年 H さん(山田中 1 年) 『地球環境の保全と日本の役割』

環境問題通信を読んで、改めて防災の大切さや役割を考えさせられた。ただ災害から直接的な被害を受けないようにするだけではなく、地球環境や人命を守ることを長い目で見て考えていく必要があると思いました。

アチェでは、マングローブを植えて津波から守ると共に地球環境の保護も行っています。そのマングローブの減少は、私たち日本人に大きく関わっていることを知りました。ただ闇雲に植林するのではなく、木の性質や植林後の環境がどうなるのかなども考えて作業しなければなりません。また、日本にも防災林があることを知りました。保安林には種類があり、一つ一つの役割が異なるので驚きました。防災林は守るだけではなく、環境を豊かにしたり、津波に対して一定の効果があることも学びました。コンクリートで固めた堤防でなくても、環境を守りつつ人命も守る防災林でも良いのかな、と感じました。

これからの日本は、日本にしかできない災害対策をする必要があると思います。例えば、その地域の環境に合った防災林や、時には堤防をつくることです。海岸に植林する樹木の性質やその木の管理のしやすさ、普代村のような大きな堤防など、その土地やその土地の人の生活にも合う形で防災することが大切だと思います。そしてその一つ一つの小さなことから、地球の環境を少しずつでも良くして環境保全にも役だっていけたら良いと思います。

05)平成 26 年度宮高 1 年 S さん(山田中入学前(小 6)) 『東日本大震災を後世に伝える方法』

インドネシアのスマトラ沖地震大津波でのシムル島の被害者数は 7 人。これは偶然や奇跡などではなく、そこにはこれまでに後世に伝えようと努力をしてきた先人たちの思いがあったからに違いないと思います。ただ語り継ぐだけではなく、歌や踊りなど身近な事に託すことで、将来に伝わっていくことを大切に考えたのだと思います。インドネシアでは、津波とは神が怒って起こしたものと考える人々が数多くおり、歌や踊りが人々に親しまれやすかったのだと思います。

日本では、津波を良くないもの、暗いものと考えています。津波というと、人々は思い出したくない、悲しい、辛いと思います。しかし、それらを乗り越え、意識を変えてゆかなければ、何度も同じことをくり返し、悲しむ人々が増えていきます。それを防ぐためにも、語り継ぐということ、伝承するということは大切です。それは、たくさんの人ではなくても、子どもや孫、友達など、できる範囲で少しずつからでもできます。恐ろしさを伝えていくことは、被害を受けた私たちだからこそできる使命だと感じます。私たちが体験したからこそ、私たちにしか伝えられないものが山ほどあると思います。

建物を巡って、映像を見るだけでは大切なことが十分に伝わりません。私はぜひ、語り継ぐということ、伝承するということを始めたいこうと思いました。二度と、たくさんの方が大切なものをなくさないように。

06)平成 26 年度宮高 1 年 N さん(新里中入学前(小 6)) 『東日本大震災を後世に伝える方法』

東日本大震災を後世に伝える方法として、まず一番大切にしなければならないことは、地震を経験したこと、津波を経験したこと、震災で大切なものが失われたということを忘れない事だと思います。忘れてしまったら、伝える方法はもう無くなってしまふのだから。

私は、小学 6 年生の寒い卒業前の春に起こった事を、まだ鮮明に覚えています。卒業制作途中に止まったミシン、揺れた時計、波打った自分の心臓の音。あんなに早くランドセルに道具を詰めたのはあれが初めてだったと思います。全員でトイレに行き、入る直前で余震が起こり、うずくまった私達を抱きしめてくれた担任の先生の大きな腕でさえも、まだ記憶に残っています。帰る途中、当時小学 1 年生だった妹が震えているのを見て、妹の手を強く握って歩きました。「こいつだけは守ってやんなきゃ」と思って。私の住んでいる所は山の中なので、津波により家が壊れたとか、大好きな人が流されたとか、そういう被害はありませんでした。しかし、幼い私達の心には地震と津波への恐怖がくっきりと残されています。決して楽観視してはいけません。それを、岩手だけではなく、他県や自分の子供達へと伝えていくことが、後世へつなげていく一歩なんだと思います。

07)平成 26 年度宮高 3 年 Y さん(重茂中 2 年)『3.11 から四年目の今、私ができること』

私は、非常に海に近い小さな集落に住んでいました。しかし、東日本大震災によってこの集落は全滅してしまい、現在も仮設住宅で生活しています。震災後、その集落は災害危険区域に指定され、家を建ててはいけないことになっています。再び同じような被害を受けないための対策の一つです。この地域は、明治三陸大津波や昭和三陸大津波でも多くの被害を受けました。このことを後世に伝えるために先人は、津波到達地点を示した石碑と、二度と多くの犠牲者をださないように「此処より下に家を建てるな」と書かれた石碑を後世に残してくれました。この石碑については、これからも伝える必要があると思います。また、小学校で1年おきに行われる、昭和三陸大津波をテーマとし、当時の様子を台本にした全校表現劇「かがやく海の重茂に」もずっと伝えていくべきだと思います。私たちは、この劇のおかげで早いうちから過去にどのようなことがあったのか分かり、津波の恐ろしさを理解することができました。犠牲者が少なかったのは、これが理由であるかもしれません。

私は先人がしてきたように、後世へ自分が体験したこと全てを伝えていきたいと思います。二度と犠牲者を出さないために。震災後に建てられた石碑にはこのように記されています。

『後世への訓戒 大地震の後には津波が来る とにかく高い所に逃げろ 住宅は津浪浸水線より高い所に建てろ 命はてんでんこ』

08)平成 29 年度山高 3 年 A さん(山田南小 5 年)『3.11 から 6 年を経た今、私ができること』

3月11日、あの日から6年が経ちました。「がれき」もほとんど無くなり、新しい建物が次々できあがってきて復興に大きく前進したと思います。そのように良い方向に進んでいる一方、一つ不安な事があります。それは、あの日を忘れている人も増えているということです。特に、震災を知らない子供達が増えていることが一番怖いと思います。今の自分にできることは、一生忘れないように若い人達にどんどん伝えていくことだと思っています。

自分も、あの日に大切な人をたくさんなくしました。当時一番思っていたことは、たくさんやり残したことがあり、とても悔しいだろうということです。そのため、私自身が一日一日をしっかりと生きて、後悔しないように生きていきたいと思いました。

自分は将来大人になったら、自分の子供に「津波はここまで来たんだ」と言うだけで、その恐怖は伝わると思うし、その子供も将来次の子へと伝えていくと思うので、絶対伝えていきたいです。

少し悲しいことは、前まで見えていた海が、防波堤で見えなくなってしまったことです。山田町は津波の被害は大きいですが、海がきれいでも素晴らしい町だと思うので、自然災害に気をつけながらも海を大切にしていきたいと思います。

09)平成 30 年度山高 1 年 S さん(織笠小 2 年)『東日本大震災から 8 年目の今、私ができること』

8年前の私は小学2年生でした。地震というものをあまり理解していなく、とても怖かったのを覚えています。帰りの会の時、机がとても動いていて、机の下にもぐるのも必死でした。

今の小学生は、震災を経験していない学年があり、小学校の先生が3月11日になると津波の話をするらしいですが、経験をしていない子供達や記憶がほとんどない子供達にどのように東日本大震災の事を伝えようか戸惑うらしいです。また、当時内陸の方の小学校に勤務していた先生方も多く、子供達に当時どのような事があったのか伝える人も少なくなっているそうです。そのため、高校生の私達や中学生が当時見た景色などを絵に描いて、小学生に説明したり、その時の気持ちなどを分かりやすく語ったりして、未来のために津波が来たらどうしたらよいのかを伝えながら、死者をできるだけ減らすようにしていきたいです。

また、地元の子供達だけではなく、将来私が山田町や岩手県を離れたとして、その時大きな地震などが来たら、経験をしていない周りの人を誘導などし、自分から動いて死者を減らしたいと思っています。身近な人が亡くなっているからこそ、そして小学生の時にいろいろな先生方や大人の人に助けてもらった分、次は私が助ける番だと思いながら大人になりたいし、津波に限らず災害に遭った方々を助けたいです。

10)平成 30 年度山高 3 年 S さん(大沢小 2 年)『東日本大震災から 8 年目の今、私ができること』

東日本大震災からあと 3 ヶ月で 8 年になります。私にとってはこの 8 年はあっという間だったと感じます。今の山田町はお店もたくさん建って、道路も新しくなったりと復興に近づいていっています。ですが、まだまだ震災前のような活気ある町にはなっていません。このままだと、ますます人口が減って、山田のお祭りなどができなくなってしまいます。この人口減少を防ぐために私ができることは、山田を全国に P R することです。山田は海がきれいで、海の幸や山の幸が豊富で、お祭りがとても盛んで、等々自慢がたくさんあります。このような自慢を全国の人に広めて、たくさんの人に山田町に来てもらい、美味しいものを食べたり景色を見たりしてほしいです。山田町の良さを知ってもらい、山田に住んで人口が増えてほしいと思います。そして、山田に移住してきた人に、山田祭りの歴史や魅力を知ってほしいし、祭りに参加して盛り上げてくれたらもっと楽しくなるので、ぜひ来てほしいです。

山田祭りが全国に広まってたくさんの人が見に来てくれるように P R することは大事なことで私は思うので、インターネットやスマホなどを使って発信して、山田祭りが全国で有名なお祭りと言ってもらえるようになったら、とても嬉しいです。震災前のお祭りより、もっともっと盛り上がって楽しい山田祭りに私達がしていきます。

11)平成 30 年度山高 3 年 K さん(轟木小 4 年) 『身近な自然環境を活用した防災・減災』

現在の山田町は、高台に住宅や道路、病院などが建ち、震災前の山田町と比べると、山だった所が切り崩されて建物ができたように思う。山を切り崩して建物を作ることは仕方がないのかもしれないが、このまま山をどんどん切り崩していくと、森林が減り、もしもの災害の時に対応できなくなってしまうと私は考える。

森林は多くの役割を担っていて、森から流れ出た栄養分が川を経てプランクトンをはじめ海の様々な生き物を育み、暴風や豪雨・豪雪の時に被害を減らしてくれたりしてくれる。家を作る時には木材を使うし、木はとても幅広い所で私達の生活を支えてくれていることが分かる。

だから、これから森林を減らさないためにはどうすればいいのかを考えていかなければならない。私が小学校の時には森林愛護少年団が木を植える活動をしたり、木の名前や役割を学ぶ機会があった。今もその活動をしているかは分からないけれども、小学生だけではなく中学生や高校生でもできるような活動を、学校行事に入れて木を植えたり、自然を大切にすることを学べたらいいと思う。木はすぐに大きくはならないが、長い年月をかけてその活動をすれば、森林が増えて、環境に優しくなり、防災や減災にもつながると私は考える。

12)令和元年度岩泉高 2 年 O さん(小 2) 『東日本大震災から十年目の今、私ができること』

東日本大震災から 10 年目の今、被災した場所はその日のおもかげもなくキレイに整備されています。だからこそ、新しい世代が津波の存在や怖さを知らないのも、私達は語り続けなければなりません。また、私達も改めて災害について思い直す良い機会だと思います。私達ができることとして、語り継ぐことの他に、木を植えたり、高台に移り住んだり等、できることはたくさんあります。備えをしないとしないとは大きな違いが生まれると思います。津波が来るところに住まないという意味の「暴露の回避」の例として、大船渡市の吉浜集落があります。戻らないように低地を水田にすることで居住できないようにしたそうです。他には、宮城県女川町では、防潮堤を作らないことにしたそうです。これらの決定には、多くの人々の葛藤や苦悩があり、それを乗り越え出した答えだと思います。また、津波の人的被害を減らすため、過去の経験を生かした一つの答えでもあると思います。普代村では、木を植え防災林を作ったことで住宅への被害がなかったそうです。このことから、防災林の大切さと植林をすることの重要性を感じました。

未来の命を守るために、十分な対策をする必要があると思います。「津波は多分来ないだろう」などという考えは捨て、「いつ来ても大丈夫なようにしよう」という考えが広まって欲しいと思います。津波から身を守るために、今までの体験や知恵を生かしていきたいです。

13) 令和2年度宮古北高1年 Oさん(年長)『東日本大震災から十年目の今、私ができること』

私は小学校に入学する前に東日本大震災を経験した。その時、保育所の先生や地域の方にはたくさん助けていただいた。私の命を助けて下さった全ての人に感謝したい。

だが、助けていただいただけでは足りない。私の母は、津波によって帰らぬ人となってしまった。そのような現実と直面した人は数えきれないくらいたくさんいるだろう。その時から、元気を取り戻せるような仕事がしたいと考えている。どの職業も人を元気にする力があると思うが、私が目指しているのは、介護をしたり、話したりする職業だ。そのためにも、日頃からコミュニケーションの取り方を研究している。どう話したら相手とほどよい距離を保つことができるのか、相手が元気になってくれるのか。だから、色々な人と会話するように心がけている。

言葉はすごい。私は小学校の頃は(特に低学年の頃は)あまり人と話さなかった。常に自分世界を楽しんでいた。だが、友達とはできなかった。あの時の私は、震災によって毎日気分が下がりぎみだった。そんなある日、なぜだか分からないが、このままではいけないと思い、勇気を出して友達と話すようにした。それが今の私につながっている。

最後に、東日本大震災から10年目の今、私ができることは、「とにかくたくさんの人と話すこと」、だ。言葉で誰かを元気にしたい、誰かの笑顔のためにコミュニケーションを学ぼうと思う。

14) 令和2年度宮古北高1年 Oさん(年長)『東日本大震災から十年目の今、私ができること』

東日本大震災から10年経った今、私にできることは、東日本大震災を知らない子達に自分達が語り伝えるという事です。私は中学生の頃、東京や内陸の中学生に『田老を語り伝える会』ということをしました。私はこの活動はとても大切だと思います。なので、宮北でも学校行事として小さい子達に語り伝える会ということが出来るんじゃないかと思っています。

このテーマとは少しはずれるかも知れませんが、私が今なりたい職業があります。それは、納棺師です。なぜこの職業かという、私は東日本大震災で4人の大切な人を亡くしました。その時は棺桶に入れてあげることは出来たけど、その他は何もしてあげられませんでした。それから、少し経った後、亡くなった方をキレイにする納棺師という仕事を知りました。私はそれから納棺師になりたいと思うようになり、もし自分が本当に納棺師になれたら、どんな状況でも、少しでもいいのでキレイにしてあげられるような納棺師になりたいです。

東日本大震災のような大きな地震・津波は、いつ、どこで起こるかは誰にも分かりません。なので、日頃から積極的に避難訓練や非常持ち出し袋などの準備をしておくことが大切だと思います。

いつ何が起こっても大丈夫なように、日頃から備えてください。そして、当たり前だと思って過ごしている毎日は、当たり前ではありません。

15) 令和2年度宮古北高3年 Mさん(小2)『私ができる国際支援活動』

私は、宮古市社会福祉協議会で、使用済み切手の収集ボランティア活動をしたことがあります。この活動は、いわて車いすフレンズ活動の一環です。アジアの国々では車いすを購入することができず、日常生活に困っている人達がたくさんいます。その方達に少しでも役立ちたいという思いを込めて、地域内で使用されなくなった車いすを修理・整備し、アジア諸国へ寄贈するボランティア活動です。整備された車いすは、海外へ運ぶ前に、いったん倉庫がある茨城県に保管され、その後国内の空港や船着き場に運ばれます。空港まで運ぶ費用は、車いす1台約2千円です。また、手荷物扱い以外に、数十台まとめてスリランカなどアジア諸国へ空輸する場合は、輸送費の負担が多くなります。そのため、使用済み切手や書き損じハガキを収集し換金し、それらを国内輸送費用の一部に充てています。この活動の目的は、活動の主体となる青少年にとって、車いすを修理・整備し、寄贈を通してアジアの国々の人達との友情を育み、福祉教育や国際交流のきっかけにしたいことです。

私のボランティア活動は、微力かも知れませんが、自分の活動の先には必要としている人がいることを自覚しながら、今後も私ができる国際支援活動として、使用済み切手の収集ボランティア活動を続けていきたいと思っています。

令和4年度 理科の冬休み課題（小論文）

今回、2011年から2021年までの11年間に、4つの高校で収集した小論文の中から15編を選びました。そして、それらの小論文を皆さんに読んでもらった上で、1つの小論文を選んで、以下のA～Cの課題についてあなたの思いや考えを書いてもらいました。

- A：あなたの選んだ小論文の筆者は、どういう思いでこの文章を書いたと思いますか？
B：あなたが共感したのはどういう所ですか？
C：あなたが選んだ小論文を読み、これからあなたができることを述べなさい。

なお、小論文を1つ選ぶ時の参考として、15編の小論文を内容別に、4つに分類しています。

『体験』：被災体験と伝承

『環境』：身近な自然環境を活用した防災・減災

『支援』：国際支援・国際交流

『生き方』：これから私ができること

提出してもらった中から、「そんな思いもあるんだ」や「そういう視点もあるんだ」という内容の代表的な小論文を、皆さんにもお知らせします。（選んだ小論文も添付）

（1）（令和4年度宮古水産高校2年 Aさん）（震災当時、保育園年中）

A：「筆者は、どういう思いでこの文章を書いたのか？」

今後、いつ災害が起きても大丈夫なように、自分の経験した事を伝えていくことが大切だという思いで、筆者はこの文章を書いたと思います。

B：「あなたが共感したのはどういう所ですか？」

私も重茂出身で、とてもこの文章に共感しました。震災前から小学生がやっていた劇の「かがやく海の重茂に」をやっていたから犠牲者が少なく済んだんじゃないかというのは、私も共感できました。

C：「選んだ小論文を読み、これからあなたができることは？」

私も震災を5歳の頃に経験したことがあります。その時は、何も分からない状態だったし、どうすれば良いか分からなくてとても怖い思いをした覚えがあります。その当時の私でも震災はすごく恐ろしいものだとか分るくらい怖かったです。

あの時は、たくさんの支援に助けられたのを覚えています。多くの地域のたくさんの方から支援物資などを貰い、すごく嬉しかったのを今でも覚えています。私の住んでいる町は海がとても近くにあり、漁師がたくさんいる町で、震災の時はみんなで助け合って乗り越えました。私も誰かの役に立てるような人材になっていきたいと思っています。

選んだ小論文（震災当時、中2）『3.11から四年目の今、私ができること』 **体験・生き方**

私は、非常に海に近い小さな集落に住んでいました。しかし、東日本大震災によってこの集落は全滅してしまい、現在も仮設住宅で生活しています。震災後、その集落は災害危険区域に指定され、家を建ててはいけないことになっています。再び同じような被害を受けないための対策の一つです。この地域は、明治三陸大津波や昭和三陸大津波でも多くの被害を受けました。このことを後世に伝えるために先人は、津波到達地点を示した石碑と、二度と多くの犠牲者をださないように「此処より下に家を建てるな」と書かれた石碑を後世に残してくれました。この石碑については、これからも伝える必要があると思います。また、小学校で1年おきに行われる、昭和三陸大津波をテーマとし、当時の様子を台本にした全校表現劇「かがやく海の重茂に」もずっと伝えていくべきだと思います。私たちは、この劇のおかげで早いうちから過去にどのようなことがあったのか分かり、津波の恐ろしさを理解することができました。犠牲者が少なかったのは、これが理由であるかもしれません。

私は先人がしてきたように、後世へ自分が体験したこと全てを伝えていきたいと思っています。二度と犠牲者を出さないために。震災後に建てられた石碑にはこのように記されています。

『後世への訓戒 大地震の後には津波が来る とにかく高い所に逃げろ 住宅は津浪浸水線より高い所に建てろ 命はてんでんこ』

(2) ① (令和4年度宮古水産高校2年 Bさん) (震災当時、保育園年中)

A: 「筆者は、どういう想いでこの文章を書いたのか？」

母親が亡くなってしまった悲しみと寂しい思い、助けてくれた人がいることへの感謝が強いのと思います。さらに、「人々を笑顔にしたい」という思いが一番強いんだなと思いました。

B: 「あなたが共感したのはどういう所ですか？」

私がこの筆者に共感したのは、「自分の力で人を笑顔にしたい」という夢です。私は料理人になって自分の料理で人を笑顔にしたいと思っています。そして、それに関連するさまざまな方法があることが分かりました。

C: 「選んだ小論文を読み、これからあなたができることは？」

これから私ができることは、「人を自分の料理で笑顔にしたい」という夢を、何があっても忘れず必ず実現させることです。それに加えて、ボランティア活動や、この小論文の筆者のように、少しでも人を笑顔にするためのコミュニケーションを学ぶなど、私にできることは沢山あるので、少しでも多くの人を笑顔にするために頑張ろうと思います。

たとえば、自分の夢に近づくために家で夕飯を作り、日頃から家族を笑顔にしたり、近所のおじいさんやおばあさんとお話ししたり、何か手伝ったり等々、考えてみれば自分ができることはたくさんあると思います。日々、できることを考えて、実行していきたいと思っています。

② (令和4年度宮古水産高校2年 Cさん) (震災当時、保育園年中)

A: 「筆者は、どういう想いでこの文章を書いたのか？」

自分自身が幼い頃に経験した出来事を、過去の事として記憶するのではなく、その事をきっかけに変わったり、人の為になる仕事に就こうという想いで書いたのではないかと私は思います。

B: 「あなたが共感したのはどういう所ですか？」

まず私も津波を経験したのが保育所の時だったのと、身内の死があった点が筆者と重なりました。また、私も人と関わる上でコミュニケーションが一番大切だと感じているからです。

C: 「選んだ小論文を読み、これからあなたができることは？」

私はこの小論文を読んでみて、私自身が経験した過去を思い出すとまだまだ悲しくなりますが、これからの世の中に発信していかななくてはいけないのだと思いました。それと同時にこの筆者のように前向きに考え、今何ができるかを考えました。あの時、私も沢山の方から支えられ、支援物資も頂きました。もしまた、大きな災害があった時に少しでも恩返しをし、困っている人のために募金に積極的に取り組むなど、出来ることを一つでも多く見つけて誰かの役に立ちたいと私は思っています。このように言葉で言うことは簡単です。だからこそ、行動に移せる人になりたいです。

③ (令和4年度宮古水産高校2年 Dさん) (震災当時、保育園年中)

A: 「筆者は、どういう想いでこの文章を書いたのか？」

東日本大震災を経験してたくさんの人に助けってもらったことへの感謝の気持ちと、母を含めた津波によって帰らぬ人となった方は数え切れないということから、自分にはどのようなことができるのかを考えて書いたと思う。

B: 「あなたが共感したのはどういう所ですか？」

元気を取り戻せるような仕事がしたいという所に共感をした。将来、自分は東日本大震災だけではなく、悲しんでいる人を元気にすることができる仕事に就きたいと思っているから。

C: 「選んだ小論文を読み、これからあなたができることは？」

私にできることは、元気にすることができるかは別として、人の役に立てる職業に就きたいと思っています。少しでも体や心に傷を受けてしまった方々を楽にできる職業に就くことが、私にできることだと思っています。今できることは正直見つからないけど、いつか役に立てるように今から頑張っていきたいと思っています。

コミュニケーションはすごく大切なことなので、これからは今以上にコミュニケーションを大切にしていきたいと思っています。今の自分のままでは人を元気にすることはあまりできないと思うので、これからはもっと良い自分に変えていきたいと思っています。努力して、周りを元気にできる人になりたいです。

選んだ小論文(震災当時、年長)『東日本大震災から十年目の今、私ができること』体験・生き方

私は小学校に入学する前に東日本大震災を経験した。その時、保育所の先生や地域の方にたくさん助けていただいた。私の命を助けて下さった全ての人に感謝したい。

だが、助けていただいただけでは足りない。私の母は、津波によって帰らぬ人となってしまった。そのような現実と直面した人は数え切れないくらいたくさんいるだろう。その時から、元気を取り戻せるような仕事がしたいと考えている。どの職業も人を元気にする力があると思うが、私が目指しているのは、介護をしたり、話したりする職業だ。そのためにも、日頃からコミュニケーションの取り方を研究している。どう話したら相手とほどよい距離を保つことができるのか、相手が元気になってくれるのか。だから、色々な人と会話するように心がけている。

言葉はすごい。私は小学校の頃は(特に低学年の頃は)あまり人と話さなかった。常に自分世界を楽しんでいた。だが、友達ができなかった。あの時の私は、震災によって毎日気分が下がりぎみだった。そんなある日、なぜだか分からないが、このままではいけないと思い、勇気を出して友達と話すようにした。それが今の私につながっている。

最後に、東日本大震災から10年目の今、私ができることは、「とにかくたくさんの人と話すこと」だ。言葉で誰かを元気にしたい、誰かの笑顔のためにコミュニケーションを学ぼうと思う。

(3) (令和4年度宮古水産高校1年 Eさん) (震災当時、保育園年少)

A: 「筆者は、どういう想いでこの文章を書いたのか？」

自分の町の良さをたくさんの人に知ってほしいという想いだけではなく、良さを知ってもらったことをきっかけとしてもっと活気のある町に戻ってほしいという、自分の町のことを想って書いたと思う。

B: 「あなたが共感したのはどういう所ですか？」

宮古市も震災に遭い、たくさんものを失ってしまったけれど、大分元に戻ってきている。もっと活気のある町にするために、たくさんの人に自分の町の良さを知ってもらいたいという所に共感した。

C: 「選んだ小論文を読み、これからあなたができることは？」

この小論文を読んで、自分の住んでいる地域の良さをたくさんの人に知ってもらいたい、と改めて思うことができました。また、自分の地域の祭りや有名な食べ物について知ってもらいだけではなく、震災に遭った後、ここまで活気のある町を取り戻すことができた地域の人全員の頑張りも知ってもらいたいのではないかと、文章から感じることができました。

私は、震災に遭った時のことだけではなく、震災に遭った後の活動や気持ちなどもたくさんの人に伝えて後世に残すことが、今自分にできることで一番重要なことなのではないかなと思います。そして、震災に遭ったことにより同情で自分の町を知ってもらうのではなく、本当の良さで宮古市や岩手県を知ってもらいたいです。

選んだ小論文(震災当時、小2)『東日本大震災から8年目の今、私ができること』体験・生き方

東日本大震災からあと3ヶ月で8年になります。私にとってはこの8年はあつという間だったと感じます。今の山田町はお店もたくさん建って、道路も新しくなったりと復興に近づいていっています。ですが、まだまだ震災前のような活気ある町にはなっていません。このままだと、ますます人口が減って、山田のお祭りなどができなくなってしまいます。この人口減少を防ぐために私ができることは、山田を全国にPRすることです。山田は海がきれいで、海の幸や山の幸が豊富で、お祭りがとても盛んで、等々自慢がたくさんあります。このような自慢を全国の人に広めて、たくさんの人に山田町に来てもらい、美味しいものを食べたり景色を見たりしてほしいです。山田町の良さを知ってもらい、山田に住んで人口が増えてほしいと思います。そして、山田に移住してきた人に、山田祭りの歴史や魅力を知ってほしいし、祭りに参加して盛り上げてくれたらもっと楽しくなるので、ぜひ来てほしいです。

山田祭りが全国に広まってたくさんの人が見に来てくれるようにPRすることは大事なことで私は思うので、インターネットやスマホなどを使って発信して、山田祭りが全国で有名なお祭りと言ってもらえるようになったら、とても嬉しいです。震災前のお祭りより、もっともっと盛り上がって楽しい山田祭りに私達がしていきます。

(4) (令和4年度宮古水産高校1年 Fさん) (震災当時、保育園年少)

A：「筆者は、どういう想いでこの文章を書いたのか？」

震災を知らない子たちが増えてきている中で、また同じようなことが起こった時に少しでも正しい判断ができるように伝えていきたいという想いでこの文章を書いたのだと思う。

B：「あなたが共感したのはどういう所ですか？」

「あの日を忘れていく人が増えている」という点と、「震災を知らない子供達が増えている」という点です。自分達よりも年下の子供たちは、震災当時小さくてほぼ記憶がないと思うので不安だという所にも共感しました。

C：「選んだ小論文を読み、これからあなたができることは？」

私はあの日はまだ4、5歳で、ほとんど記憶が残っていないけど、震災後の町の様子や暮らしを見たり、経験したりしています。思い出したくない、知りたくないという人もいると思うが、震災を忘れかけている人やその出来事を知らない子供達に、改めて津波や地震の怖さを思い出したり知ったりしてほしいと思いました。

私には、年が離れた妹が2人いるので、まずは妹や身内に津波の怖さを分かりやすく教え、怖さを知ったうえで避難場所の確認や、何があっても高台から家などに戻ってはいけないということを伝えたいと思います。あの時より犠牲者を出さないように伝承していきたいと思います。

選んだ小論文(震災当時、小5) 『3.11から6年を経た今、私ができること』 **体験・生き方**

3月11日、あの日から6年が経ちました。「がれき」もほとんど無くなり、新しい建物が次々できあがってきて復興に大きく前進したと思います。そのように良い方向に進んでいる一方、一つ不安な事があります。それは、あの日を忘れていく人も増えているということです。特に、震災を知らない子供達が増えていることが一番怖いと思います。今の自分にできることは、一生忘れないように若い人達にどんどん伝えていくことだと思っています。

自分も、あの日に大切な人をたくさんなくしました。当時一番思っていたことは、たくさんやり残したことがあり、とても悔しいだろうということです。そのため、私自身が一日一日をしっかりと生きて、後悔しないように生きていきたいと思いました。

自分は将来大人になったら、自分の子供に「津波はここまで来たんだ」と言うだけで、その恐怖は伝わると思うし、その子供も将来次の子へと伝えていくと思うので、絶対伝えていきたいです。

少し悲しいことは、前まで見えていた海が、防波堤で見えなくなってしまったことです。山田町は津波の被害は大きいですが、海がきれいで素晴らしい町だと思うので、自然災害に気をつけながらも海を大切にしていきたいと思います。

(5) (令和4年度宮古水産高校2年 Gさん) (震災当時、保育園年中)

A：「筆者は、どういう想いでこの文章を書いたのか？」

マングローブなどの自然にある植物群はすべてに意味があり、災害などから私達を守ってくれている。そんな植物達が、人間の欲望で壊されている。その課題に向き合い、皆がプラスになるような環境づくりが大切であるという想い。

B：「あなたが共感したのはどういう所ですか？」

マングローブや貴重な自然が人の手によって壊され続け、その影響は人以外にも及んでいること。しかし、単純に元に戻すと生活が成り立たなくなる現地の人が存在していて、簡単に解決できる問題ではない、という所。

C：「選んだ小論文を読み、これからあなたができることは？」

まず、スマトラ島沖地震で20数万人が亡くなったということに衝撃を受けた。台風や暴風雨・高波・高潮などの災害から守ってくれていたマングローブ林が伐採されたことにより、大津波による被害が大きくなってしまったということ。そして、伐採された所には日本向けのエビ養殖施設があったということ。これらのことから、地震や津波が人を殺したのではなく、人が人を殺したと考えても良いと思った。

しかし、この事実を受け、「エビを買わないようにしよう」というのは違うと思う。現地の生産者と私達消費者が相互に納得し、互いにプラスになるような関係づくりが大切だと考える。そのためにも、「フェアトレード」という取り組みがもっと広まれば良いと思う。

選んだ小論文(震災当時、高1)『私が考える(できる)マングローブの保護』体験・環境・支援

マングローブとは、海水と淡水が入り交じる河口・沿岸に生育する植物群の総称である。また、マングローブは他の生物が生活できるような適度な環境を提供してくれていると同時に、台風等の暴風雨や高波・潮風から土壌や陸上生物を守っている。実際に2004年のスマトラ島沖地震の20数万人が亡くなったのは、津波防止に役立つ海辺のマングローブ林が日本向けエビ養殖のために伐採されたことが大きいと報道されていたのを覚えている。

天ぷらやお寿司など、日本人はエビを食べる機会が多い。調べたところ、その証拠に日本のエビの輸入量は世界第2位で、第1位のアメリカと合わせた二国で世界のエビの消費量の約7割を占めている。日本でマングローブは奄美大島以南にしか生息しないことから、マングローブ林の減少問題についてあまり意識されていない。しかし、上で述べたことから、私達はこの問題を無視することはできない。いわば日本人の欲望のために環境が破壊されているからだ。

解決策は、日本やアメリカが消費量・輸入量を減らせばよいという単純な問題ではない。エビの生産で生計を立てている人々に大きな経済的打撃を与えるからである。経済効率が悪くても、環境負荷の少ない養殖法への転換を進めていくことこそが今後の課題なのではないか、と私は考える。

(6) (令和4年度宮古水産高校1年 Hさん) (震災当時、保育園年少)

A: 「筆者は、どういう想いでこの文章を書いたのか？」

「当たり前」だと思っていた日常がいとも簡単に壊れてしまう事、この悲劇を後世に伝えていくという意味、そしてあの日失ってしまった大切な人達へ何もしてあげられなかった事への後悔を伝えたいという想い。

B: 「あなたが共感したのはどういう所ですか？」

「当たり前だと思って過ごしている日々は当たり前ではない」という所。なぜなら、私も飼っていた犬を見殺しにしてしまったから。怖くてあまり触れられなかった昔の自分を悔しく思う所が似ていると思ったから。

C: 「選んだ小論文を読み、これからあなたができることは？」

いつ起こるか分からない自然災害への対策をしっかりとしておくこと、毎日学校へ行って友人と会って話ができることを「当たり前」だと思わないこと、そして東日本大震災のことを後世まで語り継ぐ、あるいは映像などを使って伝えていくことです。これらの他にもできることはたくさんあると思いますが、最優先するべきだと思うことを挙げました。

最近、来るであろうと予想されている千島海溝の地震(津波)についても気をつけなければならないと思いました。津波の高さは最大で三十メートル近いと予想されています。私の家の周りには三十メートル以上の高台はありませんが、できるだけ努力して、より多くの人が生き残れるようにしたいと思っています。

選んだ小論文(震災当時、年長)『東日本大震災から十年目の今、私ができること』体験・生き方

東日本大震災から10年経った今、私にできることは、東日本大震災を知らない子達に自分達が語り伝えるという事です。私は中学生の頃、東京や内陸の中学生に『田老を語り伝える会』ということをしました。私はこの活動はとても大切だと思います。なので、宮北でも学校行事として小さい子達に語り伝える会ということが出来るんじゃないかと思っています。

このテーマとは少しはずれるかも知れませんが、私が今なりたい職業があります。それは、納棺師です。なぜこの職業かというと、私は東日本大震災で4人の大切な人を亡くしました。その時は棺桶に入れてあげることは出来たけど、その他は何もしてあげられませんでした。それから、少し経った後、亡くなった方をキレイにする納棺師という仕事を知りました。私はそれから納棺師になりたいと思うようになり、もし自分が本当に納棺師になれたら、どんな状況でも、少しでもいいのでキレイにしてあげられるような納棺師になりたいです。

東日本大震災のような巨大地震・津波は、いつ、どこで起こるかは誰にも分かりません。なので、日頃から積極的に避難訓練や非常持ち出し袋等の準備をしておくことが大切だと思います。

いつ何が起こっても大丈夫なように、日頃から備えてください。そして、当たり前だと思って過ごしている毎日は、当たり前ではありません。

(7) ① (令和4年度宮古水産高校1年 Iさん) (震災当時、保育園年少)

A: 「筆者は、どういう想いでこの文章を書いたのか？」

筆者は、東日本大震災について自分が経験したこと、考えたこと、どうすれば良かったかなどの想いを後世に伝えたくてこの文章を書いたんだと思いました。とても伝わってきました。

B: 「あなたが共感したのはどういう所ですか？」

東日本大震災の時は、誰もが寒い場所で我慢していたので、そういうところの思いはとても共感できました。東日本大震災を後世に伝えることの大切さにもとても共感できました。

C: 「選んだ小論文を読み、これからあなたができることは？」

この小論文を読んで、自分だけの記憶では知らなかったことをたくさん知ることができました。地震で失われた大切なものを絶対に忘れないという想いがとてもかっこ良いなと思いました。また、後世へ伝えていくことの大切さを改めて考えることができました。

これから私ができることとして、小さい子や周りの他の県、あるいはいろいろな国々の方と交流があった時には、東日本大震災のことを伝えていきたいと思いました。あの時の現状を知らない人達にしっかりと伝えて、次にこのような大きな地震や津波が来た時に被害が少しでも抑えられるようになれば良いと思います。

② (令和4年度宮古水産高校1年 Jさん) (震災当時、保育園年少)

A: 「筆者は、どういう想いでこの文章を書いたのか？」

筆者は、東日本大震災を後世に伝えていくためにはどうすべきかという想いで文章をかいたと思います。今の時代、震災があったことすら分からない子達がいる中で、伝えていくことは大切だと改めて感じました。

B: 「あなたが共感したのはどういう所ですか？」

一番に大切にしなければならないことは、地震・津波を経験したこと、そして大切なものが失われたことを忘れない、という所に共感しました。自分が覚えている事実を伝えなければいけないからです。

C: 「選んだ小論文を読み、これからあなたができることは？」

私ができることは、自分が経験したことを忘れないでいることと、しっかりと事実を後世に伝えていくこと、それをまた次の世代に伝えてもらうことです。東日本大震災という大きな出来事があったことを理解していきたいです。

私は当時まだ5歳と小さくほとんど記憶はないけれど、高台の公園から見た海は荒れ狂っていたのを今でも覚えています。当時の小さかった私には、とてもとても衝撃的な現実だったんだと、成長してから思いました。私はこの震災がトラウマになり、今でもサイレンを聴いたり、地震が来るととても不安になります。この恐怖を「冗談」と思うことなく後輩達に知ってほしいです。

選んだ小論文(震災当時、小6) 『東日本大震災を後世に伝える方法』

体験

東日本大震災を後世に伝える方法として、まず一番大切にしなければならないことは、地震を経験したこと、津波を経験したこと、震災で大切なものが失われたということを忘れない事だと思っています。忘れてしまったら、伝える方法はもう無くなってしまうのだから。

私は、小学6年生の寒い卒業前の春に起こった事を、まだ鮮明に覚えています。卒業制作途中に止まったミシン、揺れた時計、波打った自分の心臓の音。あんなに早くランドセルに道具を詰めたのはあれが初めてだったと思います。全員でトイレに行き、入る直前で余震が起こり、うずくまった私達を抱きしめてくれた担任の先生の大きな腕でさえも、まだ記憶に残っています。帰る途中、当時小学1年生だった妹が震えているのを見て、妹の手を強く握って歩きました。「こいつだけは守ってやんなきゃ」と思って。私の住んでいる所は山の中なので、津波により家が壊れたとか、大好きな人が流されたとか、そういう被害はありませんでした。しかし、幼い私達の心には地震と津波への恐怖がくっきりと残されています。決して楽観視してはいけません。それを、岩手だけではなく、他県や自分の子供達へと伝えていくことが、後世へつなげていく一歩なんだと思います。

(8) (令和4年度宮古水産高校2年 Kさん) (震災当時、保育園年中)

A: 「筆者は、どういう想いでこの文章を書いたのか？」

現在の山田町は震災前に比べて建物が増えているが、その陰で山を崩したり森林伐採が行われたりなど環境が壊れてきているということから、自然環境を護りながら自然を活用した防災などをしていけたら良いという気持ち。

B: 「あなたが共感したのはどういう所ですか？」

震災前に比べて山がなくなって住宅地や新しい施設ができているという所と、学校で木を植える行事を取り入れたり木の名前や役割を学ぶ機会があったらいいという所に共感した。

C: 「選んだ小論文を読み、これからあなたができることは？」

世界的にも森林伐採が問題視されていて、地球温暖化も悪化してきている。建物ができていくのは良いことだけど、その裏では自然環境が悪化し、たとえばオーストラリアではその影響で気温が上がり自然火災が発生してしまうという事態が起こった。これは、自然が悪いのではなく、人間が今までしてきたことの結果だと思う。建物を造ると同時に木を植えたりした方が良いと思う。自分が学校でできることは、種や苗を植えて少しでも植物を増やすことだと思う。どうせやっても変わらないと思わずに、少しでも地球を良くしようという意識が大事だし、それが防災に繋がるなら得でしかないと思うので、緑を増やしていきたい。

選んだ小論文(震災当時、小4)『身近な自然環境を活用した防災・減災』

体験・環境

現在の山田町は、高台に住宅や道路、病院などが建ち、震災前の山田町と比べると、山だった所が切り崩されて建物ができたように思う。山を切り崩して建物を作ることは仕方がないのかもしれないが、このまま山をどんどん切り崩していくと、森林が減り、もしもの災害の時に対応できなくなってしまうと私は考える。

森林は多くの役割を担っていて、森から流れ出した栄養分が川を経てプランクトンをはじめ海の様々な生き物を育み、暴風や豪雨・豪雪の時に被害を減らしてくれたりしてくれる。家を建てる時には木材を使うし、木はとても幅広い所で私達の生活を支えてくれていることが分かる。

だから、これから森林を減らさないためにはどうすればいいのかを考えていかなければならない。私が小学校の時には森林愛護少年団が木を植える活動をしたり、木の名前や役割を学ぶ機会があった。今もその活動をしているかは分からないけれども、小学生だけではなく中学生や高校生でもできるような活動を、学校行事に入れて木を植えたり、自然を大切にすることを学べたらいいと思う。木はすぐに大きくはならないが、長い年月をかけてその活動をすれば、森林が増えて、環境に優しくなり、防災や減災にもつながると私は考える。

(9) ① (令和4年度宮古水産高校2年 Lさん) (震災当時、保育園年中)

A: 「筆者は、どういう想いでこの文章を書いたのか？」

東日本大震災の記憶を忘れないようにするため、また震災が起きても同じ過ちを繰り返さないようにするため、経験したことを次世代に伝えたり、一緒に考えようという強い気持ちで書いたと思います。

B: 「あなたが共感したのはどういう所ですか？」

小さい時ではあるけど、私も東日本大震災を経験しているので震災の怖さや辛さを知っています。思い出したくない記憶だけど、知っているからこそ語り継ぐべきだと強く共感しました。

C: 「選んだ小論文を読み、これからあなたができることは？」

私にできることは何だろうと考えた時に、一番は、経験した人が経験していない人に語り継ぐことだと思います。思い出すのは辛いことでもあるけど、また東日本大震災の時と同じようにたくさんの人の命を失わないためにも大切なことだと思います。

東日本大震災で逃げ遅れた人達は、防潮堤のすぐ下に住んでいて津波が来るのが見えなかったためと聞きました。今も防潮堤のすぐ下に住んでいる人がいると思います。また同じような津波、あるいはもっと大きな津波が来た時、同じ過ちを繰り返してしまうのではないかと思います。どうすれば一人でも多くの命を救えるのか考えて町づくりをしていきたいと思っています。

②（令和4年度宮古水産高校2年 Mさん）（震災当時、保育園年中）

A：「筆者は、どういう想いでこの文章を書いたのか？」

たくさんの人や街を飲み込んでいった東日本大震災を後世に伝えるために自分ができることや、これからすべきことを考えて、読んでいる人達に向けて語りかけるように書いている。

B：「あなたが共感したのはどういう所ですか？」

二度と同じようなことが起きないように、後世に語り継ぎ、何があったのか色々話すこと、そして、これからの街作りや防災対策について考えていく。それを担うのが私達だということ。

C：「選んだ小論文を読み、これからあなたができることは？」

震災当時のことはあまり覚えていないけど、たくさん被害があったこと、そしてたくさんの支援を受けたことは憶えています。

この先、いつ地震があり津波がやってくるのか完璧に予想することは誰にもできません。の中で、今できることは震災について知り、それを語り継ぎ、いつ起こるか分からない災害に備えることです。いつでも家を出られるように荷物をまとめておいたり、服を取りやすい場所に置いておいたり、家族や友人と話し合ったり、簡単にできることがたくさんあります。こういう小さなことでも積み重ねがあると後々助かる確率が高くなると思います。これからも常に備え、自分、そして家族や友人などたくさんの命が守られると良いです。

③（令和4年度宮古水産高校1年 Nさん）（震災当時、保育園年少）

A：「筆者は、どういう想いでこの文章を書いたのか？」

筆者は、自分がした経験をただそのままにするのではなく、次の世代に伝えたいという気持ちでこの文章を書いたと思います。震災で自分が辛い思いをしたからこそ、後世に伝えたいという気持ちが伝わってきました。

B：「あなたが共感したのはどういう所ですか？」

私は震災のことはよく覚えていないけど、震災時の写真や動画を見ると、すごく酷いものだったということが分かるので、何年後かにまた災害が起こった時に、一人でも多くの方が助かるように後世に伝えたいという所。

C：「選んだ小論文を読み、これからあなたができることは？」

震災の事をよく覚えていない私でも、人から人へ語り継がれていたことを聞いて、震災の恐ろしさを知り、どういう行動をすれば救える命が増えるのか伝えてもらいました。しかし、それを自分だけのものにするのではなく、次は私が伝えていかなくてはならないと思います。筆者が言っているように、震災はこれが最後という訳ではなく、東日本大震災よりも酷い災害が起こる可能性もあります。私たちの生活に一生ついてくるものです。次に災害が起きた時に、より多くの方が助かるように、12年前に起こった悲劇を忘れずに、この先もずっと語り継いでいかなくてはなりません。それが今を生きている私たちの最低限の役割なのだと思います。

選んだ小論文（震災当時、高2）『3.11から三年目の今、私ができること』 **体験・生き方**

私は3.11の東日本大震災を実際に経験したし、実際に目にしました。その津波があってから3年目の今、私ができることは2つあると思います。

1つ目は、後世に伝えていくことです。私達は本当に辛い経験をしました。しかし、これが最後という訳ではありません。津波や大地震は、何年、何十年、何百年後かにはまた起こるものです。もしかしたら、東日本大震災よりもひどい震災になるかも知れません。次の震災でたくさんの方の命を失わないためにも、このことを語り継ぐべきです。大人たちが語るより、私達若者が経験したことを話す方が、これからの人たちにはタメになるのではないかと思います。本当にあったことを話すのは正直辛い部分もありますが、全てを話すべきです。

2つ目は、3.11の大震災の反省をもとに、これからの街作りや防災対策について考えていくことです。これから将来、街などを復興・発展させていくのは私達です。その私達が、今からそういうことを考えていくべきです。どんな街にすればたくさんの命が救われるのか、どんなことをすれば多くの方が避難できるのか、それを考えるのはこれからの未来を担う私達だと思います。

3年前の震災で、たくさんの辛いことや反省があると思います。それを語り継ぎ、考えていくことが私達ができることであり、私達の役割なのだと思います。